

## Java開発教育に「バーチャルOJT」を採用し、短期間で実践的ノウハウを習得

メインフレーム中心のシステムからオープンシステムへの移行を目指す大鵬薬品では、技術者教育にテナートニが提供する「バーチャルOJT」を導入。これによりJavaをベースとしたアジャイル開発プロセスの習得を目的に、標準的なオープンソースプロダクト環境の下で、設計からプログラミング、テストに至るまで、実際のシステム構築を体験した。開発経験豊富なOJTトレーナーがサポートする「実作業を通じた教育(OJT:On the Job Training)」によって、短期間で実践的なノウハウを習得することができた。

### 情報システム部におけるテーマは“オープン化”

大鵬薬品は1963年6月、大塚グループと日本主要卸業者49社の出資により設立された医薬品メーカーで、医療用医薬品およびヘルスケア製品等の製造・販売を行っている。同社は創業時から成長を続けている優良企業であり、抗がん剤を中心とした医薬品の創製を通じて、世界的に存在感のある企業を目指し、新薬創製の挑戦を続けている。

同社の中で全社的な情報システムの企画・開発・運用を担当する情報システム部は総勢36名で構成されている。平均年齢は40歳を超え、部員は経歴20年を超える熟練者と少数の若手という2層構成になっている。同社の基幹システムは、メインフレーム上で稼働しているが、徐々にオープン化の方向に向かいつつある。実際、会計システムおよび生産管理システムの一部については、既にERPパッケージを導入し、メインフレームからオープンシステムへの移行作業が進行中だ。

同社情報システム部システム管理室 課長の野村 健氏は、「情報システム部として、現在技術面でのテーマは“オープン化”です。メインフレーム

についてならば、ベテラン部員は十分なノウハウを持っているので、若手への教育も可能なのですが、オープンシステムについては、十分な経験がありませんので、若手に教育することができません。何とか若手を中心にしてオープン系について学ぶ機会を作りたいと考えておりました」と語る。

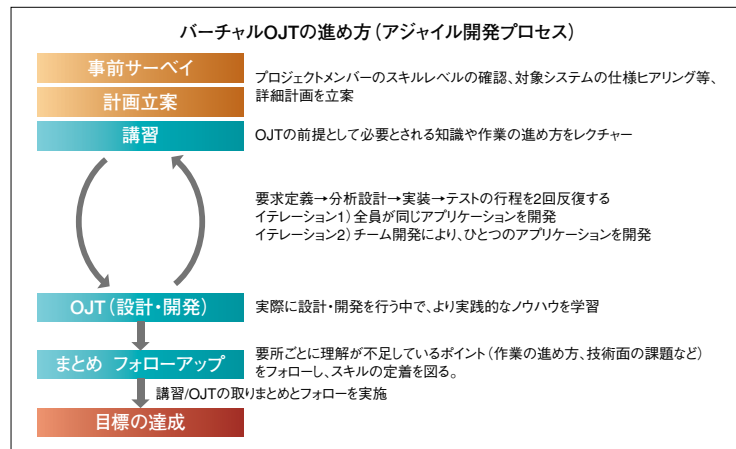
### 実際に体験することを重視し「バーチャルOJT」を導入

野村氏は、オープン系教育の第一弾として、Java教育をイズニック 代表取締役チーフコンサルタントの関根 信太郎氏に依頼した。関根氏は約30年間の企業におけるIT経験を経て、2000年にITコンサルタントとして独立した。そして現在は、Java

やUNIXシステムを中心としたITプランニングやコンサルティングを行っている。大鵬薬品は以前に、社内システムの問題を以前から付き合いがあった製薬業界専門のコンサルタントに相談した。この時に紹介されたのが関根氏であり、それが今回Java教育を依頼するきっかけとなっている。

2004年3月から約3ヶ月間、同社の情報システム部員6名が参加し、夕方から4時間、約15回にわたりJava教育が実施された。「IT業界におけるJava動向」と「Java基本」をそれぞれ2時間ずつという内容で実施され、Java動向は外部講師に依頼し、Java基本については関根氏が担当した。関根氏は、テナートニが1997年の設立時からJava専門会社として活動していることを知っていたため、3ヶ月の教育期間中、2回外部講師として、テナートニのエンジニアを起用した。

同年5月に一通りのJava教育を終了したが、次のステップとしてテナートニの「バーチャルOJT」による教育を導入することを決め、9月からさらに実践的な教育を開始した。



この間の経緯について野村氏は、「3ヶ月のJava教育を終えて、頭では理解できました。しかし、実際に作業を行い、汗を流して経験しないと身につかない部分があるということもわかり、アプリケーション開発を体験する必要性を、再認識しました」と語る。また、複数の会社を比較検討した結果、テナートニによる教育を採用した理由について、「テナートニさんには若さを感じましたし、開発現場を知っている方が講師だということも決め手になりました。先のJava教育の中でテナートニさんのエンジニアから、Java開発現場の具体的な話を聞き、大変興味深く、信頼できると感じました」と述べている。

### 実システムを開発し標準的な構築プロセスを習得

情報システム部員4名が参加し、2004年9月に「バーチャルOJT」が始まった。最初に事前調査として、メンバーのスキルレベルを確認し、詳細計画が立てられた。今回の「バーチャルOJT」の進め方には、アジャイル開発プロセスを採用し、Java/J2EEで開発を行うことになった。標準的な構築プロセスを学ぶために、ドキュメント記述はUMLを用い、フレームワークとしてStruts、開発環境としてEclipse、実行環境としてTomcat、データベースとしてMySQLといったオープンソースのアーキテクチャを採用した。

最初の1ヶ月間は、関根氏が標準的なWebアプリケーション開発に必要なツールや、基礎技術の教育を実施。10月から12月の約3ヶ月間、週1.5日~2日程度の頻度で、テナートニのエンジニア2名がトレーナーとなり、要件定義を行った後、分析・設計から実装・テストまで2回のイテレーション(反復)で実施した。

第一イテレーションでは一人一人が同じアプリケーションを開発し、第二イテレーションではチーム開発に

よってひとつのアプリケーションを開発した。要所ごとにテナートニのトレーナーが作業の進め方や技術面の課題をフォローし、予定通りアプリケーションを構築し、バーチャルOJTを完了した。

野村氏は、「バーチャルOJTによる教育の狙いのひとつは“チーム開発”でした。これまでのメインフレームの開発では、なかなか経験できなかった、チーム開発の手法を習得できましたし、標準的なWebアプリケーションの構築プロセスを学ぶことができました」と語る。

さらに野村氏は、「参加メンバーの技術レベルにはかなりの差があったのですが、うまくバランスをとって教えていただきました。実際の開発経験をもった方がトレーナーでしたので指導が適切で、参加メンバーからも教え方が丁寧でよかった、ポイントをおさえた説明でわかりやすかった、という声を聞いています。テナートニさん自身が、技術に対して中立的な姿勢を貫いていることもよかった」と高く評価している。

関根氏も、「個別の技術については本から学ぶこともできますが、チーム開発でのシステム構築は、体験して初めて理解できることも多いのです。参加メンバーは、設計からプログラミング、テストに至るまでの全体の流れを体得できたと思います」と語る。

### ノウハウを習得することは「安心感」につながる

同社では、ERPシステムへの移行にともない、システムのオープン化がますます進んでいる。このような状況の中で、オープンシステム構築ノウハウを習得できたことは、同社にとって重要な意味をもつ。

野村氏は、「今回、Javaを中心とした新しいシステム構築方法を経験したことは、われわれにとって安心感につながります。ちょうどシステムを作り

変える時期にきていますので、これから社内でJava開発プロジェクトを立ち上げたり、外部の業者とやりとりすることになります。ベンダーの言いなりではなく、対等に話ができる、ということとは大きな収穫です」という。

ITコンサルタントとしての立場から関根氏も、「Java開発環境はStrutsやEclipseなどの登場でこの1~2年で随分充実してきました。ユーザ企業でもかなり大規模なシステムを、自分で構築できるような環境が整ってきたのです。外注するにしても、ユーザ企業が知識をもつことは大事なことですし、バーチャルOJTは有意義な教育方式だと思います」と語る。

情報システム部では現在、メイン



大鵬薬品工業株式会社  
情報システム部  
システム管理室 課長  
野村 健氏



イズニック株式会社  
代表取締役  
チーフコンサルタント  
関根 信太郎氏



フレーム上で稼働しているいくつかのシステムを再構築する提案を行っており、同社にとっての最適なシステムを目指して、オープン化を進めている。



### TAIHO 大鵬薬品

◎会社概要  
社名:大鵬薬品工業株式会社  
設立:1963年6月1日  
本社:東京都千代田区神田錦町1-27  
資本金:2億円  
従業員数:2,264名(2004年6月期)  
事業内容:がんを中心とした医療用医薬品の医薬事業、一般用医薬品と医薬部外品のヘルスケア事業(滋養強壮剤「チオピタ」、胃腸薬「ソルマック」等)、国際事業の3事業で研究開発、生産、管理の活動を展開  
URL: <http://www.taiho.co.jp/>